

日本語初級教科書における 働きかけ表現初出

丸 山 敬 介

1. は じ め に

筆者は、昭和62年度文化庁日本語教育研究委嘱「日本語教育機関におけるコースデザインの方法とコース運営上の教師集団の役割の分担に関する調査研究」（日本語教育学会）の分担研究において、日本語初級教科書本文会話を二つのタイプに分け、いくつかの考察を試みた。その2タイプとは、まず、構造シラバスにのっとり日本語の構造的知識の提供を第一義的に考えるタイプである。こうした本文会話は発話の場所や状況が特定しにくく、あたかもあるできごと・状況を尋問・叙述するように展開していく。こうした教科書本文を分担研究では「叙述型」と名付けた。また別の一方は、構造シラバスにのっとってはいるもののその項目の機能性をも意識し、したがって、発話の場所や状況が特定でき表現意図も明確で多様な教科書本文のタイプである。分担研究ではこのような教科書本文を「非叙述型」とした。こうして分類してみると、次のようなことが明らかになった¹⁾。

- ・調査対象となった教科書は大まかにどちらかのタイプに分類されるが、いずれも両タイプの混合形であるといえる。
- ・一般的には、課が進むにしたがって、非叙述型発話が増えてくる。
- ・新出項目は叙述型発話で、既出項目は非叙述型発話によって再提出される。
- ・叙述型本文の発話は実生活ではある程度の不自然さは拭えないものの、その分、応用が利く。非叙述型本文の発話はある場面では極めて自然でわかりやすいものの、それ以外の場面では応用しにくいことがある。

以上の考察は今日の日本語初級教材の持つ側面の一端を示したものであるが、さら

に深い検討は行っていない。

そこで本論は、各々の教科書の叙述性・非叙述性の一つの大きな分岐点として、聞き手に対する働きかけの初出が教科書のどの当たりでどのような形でなされるのかを分析し、もって今日まで用いられてきた日本語初級教科書がいかなる特徴をそなえているのかを明らかにしてみようとするものである。なお、採取したサンプルの表記については筆者が改めたものがある。

2. 調査の方法

初級教科書を叙述型・非叙述型で分類すると、叙述型本文はたとえば次のような形で展開する。

ジョンさんは 今 何を して いますか。

ジョンさんは 今 しょくどうで しょくじを して います。

ラタナーさんは 今 何を して いますか。

ラタナーさんは へやで タイプライターを うって います。

チンさんは 今 何を して いますか。

チンさんは シャワーを あびています。

国際文流基金 (1987) 『日本語初歩』 第16課 pp. 127~128

以上は、この単元の主要指導項目である「～ている」表現による、問答形式で本文会話が進行している。こうした本文会話では、「～ている」表現の文法的意味すなわち「動作の継続」が極めて鮮明に出ていると思われるが、その分、場面・状況、発話者などが特定しにくくしたがって各発話の発話意図も特定しにくい。あえて特定するならば、ほとんどあらゆる発話が根本的に持っていると考えられる「情報の授・受」とされよう。日本語の構造的知識の提供を第一義的に考える叙述型では、そうした機能属性の欠如は当然のことと考えられる。しかしながら、'80年代中頃から急激な学習者の増加を見た今日の日本語教育では、意思の疎通を第一義的なものとし、ここでは、叙述型のように表現意図が「情報の授受」と特定されしかもそれが連続するという教科書本文会話が、質的に変容を起こしているものと思われる。たとえば次のような例がある。

添乗員：皆さん、もうすぐ出発します。バスに乗ってください。

マリー：あれっ，広田さんや林さんは？

山 本：広田さんは，今，電話をしています。

マリー：林さんは？

山 本：林さんは売店の前でアイスクリームを食べています。

マリー：木村さんと長井さんは？

山 本：さあ…。

マリー：あっ，あそこです。池のそばで写真を撮っていますよ。

文化外国語専門学校（1987）『文化初級日本語Ⅰ』第10課 pp. 73

この本文では，状況・発話者（の立場）が，旅行に行った観光地で出発時刻に参加者がバスに戻ってこない場面・添乗員と参加者というように，それぞれ容易に特定できる。そして，「～ている」が文法的には動作の継続という意味でありながらも，不在者の不在理由の説明という，その場に立脚した機能を持って用いられている。このような本文会話における変質は，同形の指導項目でも起こっているしまた従来の初級指導項目群にはない形の働きかけ表現が用いられるという形でも起こっているものと考えられる。

そこで本論では，本文会話あるいはそれに準ずる部分を各々の教科書の各单元における重要項目が象徴的に凝縮しているものと考え，そこから，叙述型の情報の授受といたいわば「静的」な機能に対する「動的」な表現意図として聞き手に対して実質的な行為を働きかける表現の初出を採取し，その表現形と表現意図，その教科書における提出位置などを明らかにし，今日まで用いられてきた日本語初級教科書の実態を明らかにすることを目的とする。

次に，調査対象とする初級教科書を示す。改訂版を含む，以下の59点である（表1参照）。

3. 調査の結果

ある働きかけ表現初出課に他の複数の働きかけ表現がある場合があるため，調査対象教科書59点から採取した働きかけ初出表現は，96である（文末「採取初出働きかけ表現」参照）。

表1 調査対象教科書

No.	教科書名	出版年	発行	対象	備考
1	改訂標準日本語読本 (第1部)	48	長沼直兄	一般	×'62
2	Naganuma's Basic Japanese Course	50	長沼直兄	一般	Section A Main Text と1はほぼ同じ。×'67
3	Nihongo no Hanashikata	54	国際学友会	一般	ひらがな縮刷版に『よみかた』('59)あり。×'68
4	Practical Japanese	62	長沼直兄他	一般	2の縮刷版。×'72
5	Modern Japanese for University Students Part1	63	国際基督教大語学科	学生	×'86
6	Beginning Japanese Part1, 2	63	エール大	一般	×'74
7(1)	再訂標準日本語読本 (第1部)	64	長沼直兄	一般	1の改訂版。×'89
8	Learn Japanese Vol. 1~4	67	メリーランド大	一般	×'72
9	Basic Japanese Vol. 1, 2	67	大阪外大留学生別科	留学生	
10	にほんごのきそ, にほんごのきそII	72	海外技術者研修協会	研修生	ローマ字版。漢字かな混じり版は'74刊。×'76
11	あたらしい日本語 Japanese for Today	73	学習研究社	一般	×'92
12	外国学生用日本語教科書 初級(改訂版)	77	早稲田大学日本語研究教育センター	学生	'67初版, '72改訂, '77再訂。いずれも本文中心の小修正。×'90
13	An Introduction to Modern Japanese	77	ジャバンタイムズ	一般	×'90
14	日本語 I	79	東大付属日本語学校	学生	『日本語教科書ガイド』には'73初版とある。×'81
15	日本語 I	79	国際学友会	学生	奥付は'77初版, '79改訂, 『データファイル』は'75初版, '87改訂×'93
16	日本語初歩 I, II	81	国際交流基金	一般	'87に改訂
17	A Course in Modern Japanese 1, 2	83	名古屋大学総合言語センター 日本語科	学生	×'93
18	生活日本語 1, 2	83	文化庁	残留孤児	×'90
19	Business Japanese I, II	84	日産自動車	ビジネスマン	×'87
20	技術研修のための日本語 1~3	84	国際協力事業団	研修生	×'90
21	外国学生用 基礎日本語	84	早稲田大学語学教育研究所	学生	
22	Japanese for Busy People I, II	84	国際日本語普及協会	一般	×'89
23(8)	Learn Japanese Vol. 1~4	84	メリーランド大	一般	8の改訂版
24	日本語 (にほんご/にっぽんご)	85	開拓社	一般	中心執筆者が5と同一で, その改訂版的存在。
25	ひろごさんのたのしいにほんご 1, 2	86	凡人社	児童	×'91
26	Exective Japanese 1~3	86	アスマック	ビジネスマン	
27	Basic Functional Japanese	87	ジャバンタイムズ	一般	
28	文化初級日本語 I, II	87	文化外国語専門学校	学生	×'94。奥付には改訂表示がないが, 『データファイル』には'89改訂とある。
29	Communication Japanese Style I	87	東京日本語学校	学生	'89改訂。×'93
30	エクスプレス日本語	87	東京YMCA 日本語科	一般	×'90
31(6)	Japanese: The Spoken Language Part 1~3	87	講談社インターナショナル	一般	6の改訂版
32(6)	日本語初歩	87	国際交流基金	一般	16の改訂版。ただし改訂版の前書きには'85改訂とある。×'92
33	Spoken Japanese	88	A K P 同志社留学生センター	学生	
34	長沼 新現代日本語	88	東京日本語学校	一般	'89改訂。×'93
35	にほんごかんたん 1, 2	88	研究社	児童	×'92

36	日本語でビジネス会話 初級編	89	日米会話学院	一般	
3704	初級日本語	90	東大留学生日本語教育センター	学生	14の改訂版。×'94
38	Japanese for Everyone	90	学習研究社	一般	
39	Crash Japanese for Businessmen	90	テンボラリーセンター	ビジネスマン	
4004	しんにほんごのきそ I, II	90	海外技術者研修協会	研修生	10の改訂版
41	留学生の日本語会話	90	国際学友会	学生	'92改訂。×'92
4233	Spoken Japanese	90	AKP同志社留学生センター	学生	33の改訂版。×'92
43	日本語 初級	91	東海大留学生教育センター	学生	
44	Situational Functional Japanese Vol. 1, 2, 3	91	筑波ランゲージグループ	学生	
45	じっせんにほんご 改訂版	92	国際日本語普及協会	研修生	'91初版。
46	研修生のためのにほんご100時間	92	TOPランゲージ日本語研究会	研修生	
47	見て・きいて・わかる会話式日本語文法1-6	92	日本語教育センター	一般	'94改訂。×'94
48	たのしいこどものにほんご	92	凡人社	児童	
49	にほんごをまなぼう 1	92	文部省	児童	
50	Communicative Japanese for Time Pressed People 会話で学ぶやさしい日本語	92	荒竹出版	一般	'94改訂。×'94
51	Communicating in Japanese	92	創拓社	学生	
52	Hello Japanese for Boys & Girls	93	International Internship Programs	児童	
53	現代日本語 改訂版	93	亜細亜大留学生別科	学生	'81初版。'93改訂版初版。
54	別科・日本語I (第二版)	93	長崎総合科学大学別科	学生	'89初版。'93第2版。
5539	Crash Course Japanese for Business	94	アルク出版	ビジネスマン	39の改訂版
5622	Japanese for Busy People I-III	94	国際日本語普及協会	一般	22の改訂版
57	Total Japanese 1, 2	94	早稲田大学 国際部	学生	
5815	進学する人のための日本語初級	94	国際学友会	学生	15の改訂版
5944	Situational Functional Japanese Vol. 1, 2, 3	95	筑波ランゲージグループ	学生	44の改訂版

注・番号の後にカッコのあるものはその教科書が改訂版であることを表し、カッコの中で改訂前のものを表す。

- ・中上級まで含め複数巻で成り立っているものは、初級部分のみを取り上げた。
- ・出版年に関しては初版の年を掲載したが、今回の調査で初版のものが入手できず二刷り以降のものを対象にした場合は、「備考」欄に「×'」で出版年を示した。また、出版年表示に当たっては、その教科書の裏付・改訂版の前書き・後述【日本語教材データファイル 日本語教科書・国際交流基金編(1983)『日本語教科書ガイド』(北星堂書店)・河原崎幹夫他(1992)『日本語教材概説』(同)などの間で異なる場合があったが、そうした際には原則として以上のうち前記3点の中で最も早いものの出版年を採用した。また、「Vol. 1」「Vol. 2」などと複数巻から成り立っているものの出版年は、第1巻の出版年を採用した。
- ・指導対象特定に当たっては、日本語教育学会教材委員会編(1992)『日本語教材データファイル 日本語教科書』の記述を参考にした。これは、「当該日本語教科書の著者または発行機関に対してアンケート用紙を送付し、後日返送されてきた回答を原文のままデータベースに入力した」(同書 pp. 3)のものである。なお、「成人と留学生」「留学生と研修生」などと指導対象に複数あげているものは、一般成人と区分けた。また、「学生」としたものの中には、進学志望者・日本国内の大学などに在学する留学生さらに海外の大学などで学ぶ外国人学生が含まれる。
- ・表中、二重線は年代の区切りを示す。

表2 表 現 形

	動 詞 系			
	Vなさい	Vて下さい	*業務上待ち依頼	Vないで下さい
~'69	2	2	2	
'75~'79			2	
'70~'74		2		
'80~'84		1		
'85~'89		2		
'90~	1	10	1	1
計	3(3.1)	17(17.7)	5(5.2)	1(1.10)

	動 詞 系			
	お願いします	Nを,お願いします	Nを下さい	Nを数下さい
~'69			1	
'75~'79			2	
'70~'74			2	1
'80~'84	1	1	1	1
'85~'89		1		2
'90~		2	2	2
計	1(1.0)	4(4.2)	8(8.3)	6(6.3)

	副 詞 系			小 計	名 起立・礼・着席
	どうぞ	ちょっと。	いかがですか		
~'69	3			3	
'75~'79	1			1	
'70~'74	1			1	
'80~'84	2			2	
'85~'89	3		1	4	1
'90~	7	2		9	1
計	17(17.7)	2(2.1)	1(1.0)	20(20.8)	2(2.1)

注 () の数字は百分率を表す (小数点第2以下四捨五入)。

分 類 表

(1)		
Vましょう	Vませんか	Vます (か)
2		
1	1	1
2	3	1
2		1
7(7.3)	4(4.2)	3(3.1)

(2)		小 計	形容詞系	小 計
NはNです	Nがありますか系		～がいいですね	
	1	10		
	1	5		
	1	6		
1		9		
3		14		
		22	1	1
4(4.2)	3(3.1)	66(68.8)	1(1.0)	1(1.0)

詞 系			小 計	総 計	教科書数
はい, N。	Nは?	Nです(よ)。			
			0	13(13.5)	9
			0	6(6.3)	2
			0	7(7.3)	4
	1	1	2	13(13.5)	8
2			3	21(21.9)	13
1		2	4	36(37.5)	23
3(3.1)	1(1.0)	3(3.1)	9(9.4)	96(100)	59

3-1. 初出表現形 (表2 参照)

採取した働きかけ表現を品詞別にみると、動詞系が66 (68.8%), 副詞系20 (20.8%), 名詞系9 (9.4%), 形容詞系1 (1.0%) であった。それらを年代別にみてみると、'80年以降ではほぼ6割、'90年以降のものだけでももともと教科書数が多いが全体の4割弱を占め、'90年以降に一気に増加した様子がうかがわれる。さらにそれを異なりでみてみると、'70年以前の教科書では8種、'70年~'74年4種、'75年~'79年5種、'80年~'84年12種、'85年~'89年11種、'90年~16種であった。やはり、時代が下るにしたがって、表現形の種類が着実に増えているといつてよからう。

一般に、日本語教育初級段階では「NはNです」が最も早く提出され続いて「います・あります」、そして発展的な形として数・形容詞を交えたそれら両表現の順で提出されるが、今回の調査では、「NはNです」・「Nがあります」系はそれぞれ4 (4.2%)・3 (3.1%), 計7 (7.3%) であり、決して数の上では多くない。しかも、最も数の多い'90年以降の教科書では両者とも扱われておらず、今日の働きかけ表現初出は、従来からの一般的な指導項目に機能性を付与する形よりも、従来この段階では扱われていなかった項目を用いることによってなされている様子がうかがわれる。

以下各表現ごとにみていくと、まず、「NはNです」は通常事物の一致（・不一致）の表現として提出されるが、今回の調査で働きかけ表現と認められたのは、No. 19「これは私の名刺です。」、No. 36「これはおみやげです。ワインとチーズです。」の物品を勧めるとき、及びNo. 28「この大きい猫は誰のですか。」の獣医の診察室に紛れ込んだ猫の受け取りを飼い主に要求するとき、さらに同じくNo. 28「その小さい猫は私のです。」で他人が自分の猫を持っていこうとするのを制するときであった。これらの内、物品を勧めるときの形としては、「これはプレゼントです。どうぞ。」(No. 34) のように、「どうぞ」とともに用いられる特徴的な形があり、そうした例はNo. 19・No. 36以外に6例あった（ただし、今回の調査では「どうぞ」がその機能を中心に担っているとしてこの6例は「どうぞ」の事例として分類した）。この「NはNです。+ どうぞ。」という形は、初級教科書における初出働きかけ表現の一つの典型と考えてよからう。また、No. 28の2例は状況・発話意図ともにやや特殊ではあるものの、従来からある指導項目がある状況下のもとに明確な表現意図を持った例といえよう。

事物の存在を表す表現として提出される「Nがあります」が用いられていたのは、No. 3「黒いシャツもありますか。」、No. 11「フィルムはありますか。」、No. 14「もっとやすいのがありますか。」の、いずれも買い物における物品提示要求場面における3例であった。けれども、これらは'70年代までに出現しているだけで、'80年代、'90年代にはみられない。後述するように買い物場面は計22例あるが、年代別に見ると、ほぼ各期3～4例で一定しており、特に'80年以降減っているわけではない。しかしながら、その場面がやや変化しており、物品提示を要求する場面は'80年代・'90年代ではわずか1例しかなく、代わりにNo. 30の「フィルムを一つ下さい」No. 45の「シャンプーを下さい」のように購入希望物を明示しその購入意図を表す場面が多用され、そのことが初出表現形としての「Nがあります」の数の少なさに影響しているものと思われる。

一方、自ずと働きかける形と考えられるその他の動詞系はそのバリエーションも多く、動詞の活用形だけでも7種、これらに「お願いします」系・「下さい」系を加えると計11種類である。そして、その多様化は'80年代から始まり'90年代において一気に進んでいる。前述の通り、動作性の動詞の提出は「NはNです」「Nがあります」がすんでからというのが一般的であるが、こうしたバリエーションを多さを見ると、従来はもっと後で提出されていた指導項目があるいはこのレベルでは扱っていなかった項目が提出される形で、表現意図の初出が行われているケースが多いといえよう。

最も多かったのは「Vて下さい」という形で17 (17.7%)、これに「業務上待ち依頼」の「ちょっと待って下さい・ちょっとお待ち下さい・少々お待ち下さい」を含めると、「V+下さい」系で22 (22.9%) を占めた。しかも、それらの表現意図は、次の通り、買い物における物品提示要求3、教室用語5、その他9、業務上待ち依頼5とバラエティをみせている。

「Vて下さい」	買い物	教室用語	その他	計	業務上待ち依頼
・見せる	3		1	4	・ちょっと待って下さい 2
・見る		2	1	3	・ちょっとお待ち下さい 2
・待つ		1	2	3	・少々お待ち下さい 1
・言う		2		2	
・借りる			2	2	
					計 5

・呼ぶ	2	2		
・取る	1	1		
計	3	5	9	17

また、「Vて下さい」の特徴は'90年代に急増していることで、'80年代までは1～4例しかなかったものが'90年以降になると一気に11例を数えるまでになっている。その一般定着化の最たる例として、No. 38がある。No. 38は、教師用指導書を付属しその冒頭に「教室用語」として「Vて下さい」を提出しているが、その指導書第1課ではそれを受け明確に指導項目と位置づけ、「開ける・見せる・食べる・貸す・書く・読む・飲む・取る・待つ」の動詞を出し、その上、「Vて・Vて下さい・Vて下さいませんか」の3つの形を提出することとしている（『Japanese for Everyone 教師用指導書』pp. 20～21）。これは、今回の調査では、第1課で「Vて下さい」を正面切って扱った特異な例であった。こうした現象も、表現意図初出が従来このレベルで用いられていなかった表現によってなされていることを示唆するものといえよう。

「Vて下さい」の次に多いのは「Vましょう」の7例であるが、内訳は、授業開始などの指示を表す教室用語4、意向伺い・誘い・確認がそれぞれ1である。「Vて下さい」と比べると、数・種類とも少ない。年代的に見ても、1～2例ずつである。これは、その表現意図をみてもわかるように、「Vて下さい」の汎用性に「Vましょう」のそれが及ばず、「Vましょう」が用いられるのはやや特殊な状況であること、そうした状況が表現意図初出の段階では扱いにくいことによるものと思われる。けれども、'80年以降はいずれかの教科書の初出の形となっており、それが全体のバラエティに影響を与えていることに変わりはない。

一方、「Vなさい・Vないで下さい」は、働きかけ表現初出としてはあまり用いられていない。'70年以前の「Vなさい」は、No. 1及びその改訂版No. 7の2例で、いずれも「行く・来る・入る・出る」・方向を表す助詞「へ」の導入課で学習者に教室の出入りをさせてそれを叙述するという形を取っている。'90年代の「Vなさい・Vないで下さい」はNo. 53にあるもので、単元冒頭に基本構文的に提出されているのである。これは、初出表現形が多様化しているとはいっても、ともすれば緊張をはらむような両表現にまでにはそれが及んでいないことを示していると考えられる。また、平易な形である「Vます」も予想外に用いられておらず、タバコを勧めている

No. 18の「タバコ、吸いますか」、同じくたこを勧めているNo. 57の「食べてみますか」、旅程案内を申し出るとともに出発を促しているNo. 26の「では、ホテルへ案内します。」の、3例のみであった。一般に物品や飲食を勧める場合には「Vますか」という形よりも後述の「どうぞ」が広く用いられ、また、動作性動詞の初出の段階ではその意思表示などといった機能よりも、その構文などに教師・学習者の興味が行くものと考えられるが、そうしたことが「Vます」形の数の少なさに表れていると考えられる。

その他の動詞系では、「Nを下さい」および「Nを、数、下さい」が計14 (14.6%)で多い。年代別に見ても、各年代平均してコンスタントに用いられている。そして、これらの内、物品購入・飲食物注文などが12を占めている。こうしてみると、初級冒頭の諸単位では、買い物・注文等を中心としたサービスの授受場面において表現意図が初出となるケースがいずれかの教科書に必ずみられるといえる。また、「お願いします」に関するもよく似た傾向があり、単独で用いられているNo. 20の郵便局における注目喚起を除くと、No. 17・No. 47が飲食物注文、No. 26がタクシー乗車時の行き先告げ、No. 40が宿泊先での鍵渡し依頼であった。

一方、動詞系が66 (68.6%) 用いられているのに対して、形容詞系はわずかに1例 (1.0%) である。たとえば、No. 36の形容詞の指導課には、…「すみません。その赤いネクタイを見せてください。」「はい、どうぞ。」「少し太いですね。」「…、「いくらですか。」「2万円です。」「高いですね。」「……(No. 36『日本語でビジネス会話 初級編』第5課 pp. 23) のように、店員の薦めを拒否し別の品物を提示するよう要求している形容詞の働きかけ表現があるが、初出としては他の表現に譲っている。

副詞系では「どうぞ」が17 (17.7%) で、「Vて下さい」と並んで今回の調査で最も多く用いられていた。各年代ともよく用いられているが、やはり'90年代に入って急に増えている。それは、現実の意志疎通を盛り込みたいという教科書執筆者の姿勢と、「どうぞ」の日常表現における使用頻度の高さ、使用場面の明解さ、初級学習者にとっての発言のたやすさの表れと考えられよう。今回の調査では、名刺・贈答品・飲食物を差し出したり勧めたりしその受け取りを促すものが11、入室促しが3、飲食開始勧めが1、状況設定なしの勧めが2であった。そして、前述のように、「NはNです」とともに用いられているのが特徴的で、17の「どうぞ」の内、6例がこうした

形であった。

最後に、名詞系は全体の約1割を占めはするものの、個々の例は多いものでも計3例にとどまっている。その内訳は、「起立・例・着席」の形で教室用語として用いられているもの2、「はい、お茶」の形で飲食物を勧めているもの2、「ご飯ですよ」の形で食事ができて着席を求めているもの2、「お砂糖は(?)」の形で食品に嗜好品を加える旨申し出ているもの1、「忘れ物ですよ」の形で忘れ物を指摘しているもの1、「それじゃ、はい」の形で代金を渡しているもの1であった。これらは第1課に提出されているもの5、同第2課3、第5課1であるが、これらの課ではいずれも文型としては「NはNです」が中心となっており、採取例のような呼びかけ・呼びかけに準ずる形、述部が省略された形などはこの時期にはなじみにくいという配慮がその数の少なさの裏に働いているものと考えられる。

3-2. 初出表現意図 (表3参照)

3-2-1. 表現意図の種類と表現形

初出を表現意図別に分析すると、各年代通して多いのは、順に、依頼16 (16.7%)、意志表示15 (15.6%)、指示・促し14 (14.6%)、勧め11 (11.5%)、要求10 (10.4%)であった。異なりでみてみると、'70年以前の教科書では7種、'70年～'74年4種、'75～'79年3種、'80年～'84年8種、'85年～'89年10種、'90年～9種であった。'80年以降教科書数が増えたこともあって、約10種という線で固定化している。ただ、'70年以前の教科書は、'80年～'84年と同じ教科書数であり、表現意図もほぼそれと同数となっている。

注目すべきは表現意図とその場面・状況との結びつきの強さで、たとえば、依頼では業務上の待ち依頼・物品渡し依頼、意志表示では物品購入意図表示、指示は教室用語、勧めでは飲食勧め、という具合に固定化しており、あまりバラエティを持っていない。これは、今回の調査を働きかけ表現初出の分析と限っているため、そこでは、あまり複雑な状況は用いられず、その表現が用いられる典型的な状況でなおかつ学習者が遭遇するであろう極めて頻度の高い状況しか扱われていないためと考えられる。

個々の表現意図をみてみると、まず、依頼で最も多かったのは、「少々お待ちください」などの業務上待ち依頼の5、次いでホテルで自室の鍵を求めなどの物品渡し

表3 表現意図分類表

	指 示	要 求	依 頼	誘 い	勧 め
～'69	4	1	3		2
'70～'74		1	3		
'75～'79		3		2	1
'80～'84	1	1		2	1
'85～'89	4	1	1		4
'90～	5	3	9		3
計	14(14.6)	10(10.4)	16(16.7)	4(4.3)	11(11.5)
	促 し	申し出	提 案	意向伺い	確 認
～'69	1			1	
'70～'74	1				
'75～'79					
'80～'84	3	1			
'85～'89	3	1			1
'90～	6		1		
計	14(14.6)	2(2.1)	1(1.0)	1(1.0)	1(1.0)
	禁 止	意思表示	注目喚起	計	教科書数
～'69		1		13(13.5)	9
'70～'74		1		6(6.3)	2
'75～'79		3		7(7.3)	4
'80～'84		3	1	13(13.5)	8
'85～'89	1	3		21(21.9)	13
'90～	1	4	4	36(37.5)	23
計	2(2.1)	15(15.6)	5(5.2)	96	59

注 () 内の数字は百分率を表す (小数点第2以下四捨五入)。

依頼の3であった。その、業務上待ち依頼(「ちょっと待って下さい」2・「ちょっとお待ち下さい」2・「少々お待ち下さい」1)以外の表現形は、「Vて下さい」8、「Nを下さい」2、「Nをお願いします」1の計11で、他の意図と比べると種類が多かった。依頼というのは日常生活においてもその頻度が極めて高くそれゆえ初級学習者といえども最も必要とされる機能であると思われるが、それがこうした表現形の多様さになって表れているといえよう。

一方、意志表示では、そのすべてが、「～をください」「～お願いします」系で客が店員に物品を指定しそれを購入（注文）する意図を示すものであった。こうしたことから、日本語教育初級の冒頭段階では、学習項目導入・定着に買い物場面がよく用いられている様子がうかがわれる。

指示は、「Vて下さい」4、「Vましょう（か）」4、「Vなさい」3、「起立、着席、礼」2、「N、お願いします」1で、その内、タクシーに乗ってその行き先を指示する1例を除いては、すべてが教室用語あるいはそれに準ずるものであった。また、促しでは、「NはNです。+ どうぞ。」あるいはそれに準ずる形で物品の受け取りを勧めているもの8、「どうぞ」単独の形で物品の受け取りを勧めているもの3、同じく「どうぞ」の形で入室を勧めているもの3であり、「NはNです」で物品を提示し、「どうぞ」でその受け取りを促す、というのがその典型であった。

さらに、勧めでは、飲食物を勧めている例が11例中9例を占めた。その形は他の表現意図に比べると多彩で、「さあ、どうぞ」「Nをどうぞ」「はい、N」「N、Vますか」「Vませんか」「もういっぱいいかがですか」が用いられていた。他の2例は、状況なしの「どうぞ」である。

最後に、やや強い表現の要求であるが、これは客が店員に「Nがありますか・Nを見せて下さい」などの形で物品の提示を要求しているものが6、税関職員が渡航者にパスポートの提示を求めているもの1であり、自ずと業務上で要求する者・される者、それぞれの立場、そしてその状況が明確なもので、特に緊張した人間関係というには当たらないものであった。残り3例は、食事の用意ができて家族に着席を要求するもの2、猫の受け取りを飼い主に要求するもの1であったが、これらも緊張をはらむという性格は薄いものといえた。それは、初級段階の冒頭ということを考えれば当然であろう。

以上に対して、提案・意向伺い・確認・申し出・禁止の各表現意図は1例あるいは2例しかなかったが、これは、これらの表現意図は初級学習者にはやや込み入った状況のやや高度なものであり、まして、初出となると極めてその数が限られることによるものと思われる。各々の状況・表現形は、順に、レストランで友人によい席を示して着席を提案する「～がいいですね」、休日の過ごし方を尋ねる「Vましょう」、休日の予定を話す1連の会話の最後で行楽の約束を確認する「Vましょう」、コーヒーに

砂糖を入れようかと申し出る「Nは?」・宿泊先へ旅行者を案内する旨申し出る「Vます」、他人が自分の猫を持っていこうとするのを制する「NはNです」・状況設定なしの禁止、であった。

その他5例、4例を採取したのは注目喚起と誘いであった。前者は「～君。ちょっと」の形でパーティで教官が学生を呼び止めているもの2、「お願いします。」の形で郵便局員の注目を引いているもの1、「あっ、ちょっと待って下さい」「忘れ物ですよ」の形で忘れ物の持ち主と思われる者に呼びかけ確認しようとするものそれぞれ1であった。一方後者は、「Vませんか」の形で遊興・行楽に誘っているもの2、「Vましょう」の形で同じく誘っているものが1、状況設定なしの「Vませんか」の誘いが1であった。いずれにしろ、今日の日本語初級教科書では、「Vませんか」「Vましょう」表現を使った誘いの単元がしばらく後に1課設けられているのが普通で、初出としてそうした形で働きかけ表現が出てくるのは少数であるといえよう。

また、表現意図上特に注目されたのは、No. 39 及びその改訂版の No. 55 であった。この教科書は40時間でビジネスマン対象にサバイバル・ジャパニーズの指導を行おうとするものであるが、その第1課に「どうも」と「どうぞ」だけで、出会い・別れのあいさつ、入室・座席・飲食物などの勧め及びそれに対する礼、謝辞などの機能を果たしてしまう例が場面を示すイラストとともに約20出されている。その中には、働きかけ表現ではなくその受け表現として寿司を勧められて「寿司はどうも……。」とそれを辞退する例もある。40時間という、日本語教科書の予定学習時間では最短と思われる制約があるからこそなされた、第1課で表現意図が多彩に提出されている例である。

3-2-2. 場面・状況

次に、場面・状況と対人関係についてみておく。

採取した96表現の内、最も多かった場面・状況は店頭で商品を吟味し注文する一連のプロセスの中のいずれかの部分に当たるもので22例(22.9%)、これにレストランなどで飲食物を注文するなど4例(4.2%)、ホテルのフロントで鍵の受け渡しなどする5例(5.2%)、さらにその他(学校から奨学金を受け取る2、タクシーに乗って行き先を告げる1)3例を加えると、公共の場でのサービスの授受が34例、35.4%を占める。一方、学校場面で最も多いのは、教師が学生に教室で何らかの指示を出していると思われるもので13例(13.5%)、これはサービスの授受に次いで2番目に多い場

面・状況であるが、これらはいずれも教室用語としての提出で、1例を除いて受け表現を伴っていないものである。それ以外で教師と学生がやりとりしているものは5例あったが、忘れ物の持ち主をさがしているもの2、パーティの席で教師が学生を呼び止めているもの2、寮で教師が学習者に部屋の鍵を渡すもの1で、ことさら教師と学習者に特徴的な場面・状況とはいえないものである。学生同士の発話では、日本人学生と外国人学生との間で遊興の誘いをしているもの2、同じく日本人学生と外国人学生との間で出会いのあいさつをしているもの2であった。

それ以外では、来訪者を迎えてもてなしているものが多く8例(8.3%)、次いでホームステイ先の家庭などで食事をしているもの5(5.2%)、ビジネスマン同士で初対面のあいさつをしているもの4(4.2%)、その他計13(13.5%)であった。

けれども一方で、依頼・勧め・誘いなどその機能はわかるものの、誰と誰がどこでどのような状況下で発話しているのか特定できないものが14例(14.6%)あった。これらのほとんどは単元冒頭に主要学習項目の提示の形で提供されているケースであるが、その場面・状況性の希薄さを問題にするよりも、むしろ学習項目が明確な機能を持った形、すなわち本論でいうところの非叙述性がみられる点を前向きにとらえるべきであろうと思われる。

これら場面・状況を年代を通した異なりでみると(状況設定なしは除く)、'70年以前の教科書では5種、'70年~'74年2種、'75年~'79年2種、'80年~'84年7種、'85年~'89年13種、'90年~18種であり、場面・状況においても'80年代後半から多彩になった様子がうかがわれる。

なお、対人関係をみておくと、やはり客と店員・従業員それに準ずる者との間の発話が最も多く34(35.4%)、次いで教師と学生18(18.8%)、来訪者と家人8(8.3%)、家族同士及びそれに準ずるもの8(8.3%)、友人同士7(7.3%)、ビジネスマン同士4(4.2%)、その他3(13.5%)、特定できず14(14.6%)であった。これらの年代を通した異なり(状況設定なしは除く)は、'70年以前の教科書では3種、'70~'74年3種、'75年~'79年5種、'80年~'84年4種、'85年~'89年8種、'90年~9種であった。

3-3. 初出位置及び初出学習時間

初出働きかけ表現の提出位置及びその累計学習時間は表4の通りである。

表4 働きかけ表現初出位置及び初出時間数

No.	学習時間 a	総課数 b	時間数 a/b=c	働きかけ 初出課 d	提出位置 d/b	提出時間 c × d
1	560~640	50	11~13	10	20	110~130
2	280~320	50	6	3	6	18
3	200	60	3	13	22	39
4	240	30	8	1	3	8
5	160	40	4	13	33	52
6	各175~200	20,14	10~12	1	3	10~12
7 (1)	560~640	50	11~13	10	20	110~130
8	各75	各15	5	1	2	5
9	各200	各25	8	2	4	16
10	各100	30,20	3(含,復習)	2	4	6
11	200	30	7	4	13	28
12	300	40	8	4	10	32
13	300	30	10	2	7	20
14	300	32	9	6	19	54
15	300	36	8	13	36	104
16	300	34	9	6	17	54
17	各150	各12	13	1	4	13
18	明記せず	24,9	/	2	6	/
19	280	20,15	8	1	3	8
20	各100	各15	7	4	9	28
21	明記せず	53	/	15	28	/
22	50,240	30,40	4	2	3	8
23 (8)	各75	各15	5	2	3	10
24	250~270	35	7~8	8	23	56~64
25	380	50,45	4	1	1	4
26	各50~70	各10	5~7	1	3	5~7
27	120	24	5	5	21	25
28	300~350	18,19	8~9	3	8	64~72
29	280	40	7	3	8	21
30	40~50	20	2~2.5	4	20	8~10
31 (6)	300	12, 12, 6	10	1	3	10
32 (16)	300	34	9	6	17	54

33	70~90	39	2	1	3	6
34	各240	26,20	9~12	2	4	18~24
35	明記せず	20,10	/	6	20	/
36	300	46	7	2	4	14
37(14)	300	28	11	1	4	11
38	200	27	7	1	4	7
39	40	18	2	1	6	2
40(10)	各100	各25	4	2	4	8
41	明記せず	30	/	1	3	/
42(33)	70~90	39	2	1	3	6
43	200	24,22	4	1	2	4
44	350	各8	15	1	4	15
45	60	20	3	3	20	9
46	100	12	8	2	17	16
47	300	23,20,17 19,19,23	2	14	12	28
48	明記せず	37	/	1	3	/
49	100	33	3	1	3	3
50	150	30	5	4	13	20
51	140~180	31	5~6	5	16	25~30
52	明記せず	28	/	5	18	/
53	150~200	30	5~7	17	57	85~119
54	300	38	8	5	13	40
55(39)	40	19	2	1	5	2
56(22)	60,120,120	30,20,20	4	2	3	8
57	350	40	8	2	5	16
58(15)	300	22	14	4	18	56
59(44)	350	各8	15	1	4	15

注・学習時間の特定に当たっては、日本語教育学会教材委員会編（1992）『日本語教材データファイル 日本語教科書』の記述を参考にした。これは、「当該日本語教科書の著者または発行機関に対してアンケート用紙を発送し、後日返送された回答を原文のままデータベースに入力した」（同書pp. 3）ものである。

- 各課所要時間数「a/b」は、学習時間を総課数で割り小数点以下を四捨五入した。
- 「提出位置d/b」は、働きかけ表現初出課を総課数で割り小数点以下を四捨五入した百分率で示した。
- 「提出時間c×d」は、各課所要時間に働きかけ表現初出課の課数をかけたものである。
- 表中、二重線は年代の区切りを示す。

これらを年代別にみると、次の通りである。

	教科書数	第1課での初出教科書数	初出提出位置 平均値(%)	初出累計学習時間 平均値(時間) *
~'69	9	3	12.6	45.6
'70~'74	2	0	8.5	17.0
'75~'79	4	0	18.0	52.5
'80~'84	8	0	9.1	20.2
'85~'89	13	3	10.4	25.9
'90~	23	11	10.3	20.8
総平均	59	17	11.0	28.3

* 想定学習時間に幅のあるものは、その最大値を採用した。

総平均で見ると、教科書全課に対して11.0%のところで働きかけ表現が初出となり、それは日本語学習を始めてから28.3時間経過したところ、といえる。機関によって学習時間は一定しないが仮に1日の学習時間を4時間とすると、7日程度、1週間あまりたったところで働きかけ表現が初出となる。

年代別にみると、提出位置は'80年代以降は約10%で一定しているといえよう。全体的に見ても、'70年代後半は遅くなっているがほぼ10%前後での初出と考えてよからう。こうした提出位置の一定性は、初級段階におけるシラバスの特性によるものと思われる。学習者の能力やニーズによってシラバスが多様化する中上級と違い、初級段階では全体として構造シラバスが定着しており、ことに冒頭部分では学習項目及びその提出順が固定していると考えられる。それゆえ、約10%での提出が一定しているものと思われる²⁾。しかしながら、平均値ではそうであるが、第1課で初出となっている教科書17点の内6割強11点³⁾が、'90年に作成された教科書である。これは、'80年代後半から盛んになってきたコミュニケーション・アプローチの影響を受け、日常のより現実的な意思の疎通を重視してきたことの表れと考えられる。なお、最も遅い提出位置は、年代順に、33%、13%、36%、28%、23%、57%である。'90年代が突出しているが、これはNo. 53で、'93年の改訂であるが、実は初版は'81年である。それを除くと'90年代は20%で最も遅い初出となる。こうした数字からは、年代が下がるにしたがって初出が10%程度をめぐりあがっていく様子がうかがわれる。

提出位置がほぼ一定しているのに対して、提出までに要する学習時間は'90年代に

近づくにしたがって短くなっているといえよう。'70年以前・'70年代後半に比べると、1/2以下の学習時間で働きかけ表現が初出となっている。毎日4時間の学習時間とすると、1週間以内での初出である。これは、提出位置そのものが早くなってきたことに加え、学習者の多様化が進み、短期学習者用の教科書が作成されるようになってきたことが影響していると思われる。ちなみに、想定学習時間（複数冊あるものはその合計）が100時間以下の教科書は、'80年前半までは皆無、'80年後半は2点、'90年以降は6点である。これらの教科書では前述 No. 39 及びその改訂版の No. 55 のように、冒頭から積極的に働きかけ表現が提出され、計8点の内1課に働きかけ表現が提出されているものは5点であった。

3-4. 「教室用語・日常表現」別枠設定の有無とその働きかけ表現

今回の調査では、「教室用語」あるいは「日常表現」などとして正規の単元群とは別枠で教室内外の使用頻度の高い表現を集め提出している教科書を調査し、そこに採録されている働きかけ表現の表現形とその表現意図をも調べた。次にその調査結果を記す（表5参照）。

調査教科書59点の内、正規単元とは別に「教室用語・日常表現」を設けているもの15点、その他教師用指導書などに設けているもの2点、計17点、全体の28.8%が別枠に設けている。年代別に見ると、'70年以前の教科書では2、'70年～'74年1、'75年～'79年1、'80年～'84年2、'85年～'89年3、'90年～8である。年代別の出版点数が異なるので単純な比較はできないが、少なくとも'90年以降出版の教科書は、その34.8%に別枠で「教室用語・日常表現」部分を設け、そこでは正規単元における提出順とは無関係にある表現がある機能を持って用いられていると考えられる。一方、これとは逆に、正規単元の1部を「教室用語・日常表現」としているもの10点であった。

別枠の「教室用語・日常表現」17点から採取した働きかけ表現は異なりで44例あったが、その表現形を見てみると、最も多いのは「Vて下さい」で12、次いで「Vましょう」7、「(～さん・いっしょに)どうぞ」5、「Vないで下さい」・「(もう1度)お願いします」4、以下、「Vて」「もう1度」「(これで・では)、終わります」各2、「Vよう」「おV下さい」「～を下さい」「質問があります」「質問はありませんか」

表5 「教室用語・日常表現」部分別枠設定の有無とその働きかけ表現

No.	有	無	異なり提出働きかけ表現	表現意図	備	考
1		●				
2		●				
3		●				
4		●				
5	●		<ul style="list-style-type: none"> ・さあ、始めましょう。 ・いっしょに読んで下さい。 ・本を見ないで下さい。 ・～さん、どうぞ。 	<ul style="list-style-type: none"> 指示・促し 指 示 禁 止 促し・指示 		
6	●		<ul style="list-style-type: none"> ・聞いて下さい。 ・英語は使わないで下さい。 ・お願いします。 	<ul style="list-style-type: none"> 指 示 禁 止 依頼・指示 	正規課前の「Introductory Lesson」に収録。	
7 (1)		●				
8		●				1・2課が、実質、「教室用語」になっている。
9		●				
10	●		<ul style="list-style-type: none"> ・始めましょう。 ・いっしょにどうぞ。 ・もう一度(言って下さい)。 	<ul style="list-style-type: none"> 指示・促し 指 示 指 示 		
11		●				
12		●				学生用文法解説書には、「日本語で言って下さい」などが収録されている*1。
13		●				
14		●				
15		●				
16		●				
17		●				
18		●				
19		●				
20	●		<ul style="list-style-type: none"> ・始めましょう。 ・聞いて下さい。 ・いっしょにどうぞ。 ・これで終わります。 ・質問があります。 	<ul style="list-style-type: none"> 指示・促し 指 示 指 示 終了明示 注目喚起 		
21		●				
20	●		<ul style="list-style-type: none"> ・ちょっと待って下さい。 ・もう一度お願いします。 	<ul style="list-style-type: none"> 依 頼 依 頼 		
23 (8)		●				1・2課が「教室用語・日常表現」の導入課になっている。
24		●				
25		●				1課が「教室用語・日常表現」の導入課になっている。
26		●				
27		●				
28	●		<ul style="list-style-type: none"> ・どうぞ ・～を下さい。 	<ul style="list-style-type: none"> 勧 め 依頼・要求 		
29		●				
30		●				
31 (6)	●		<ul style="list-style-type: none"> ・聞いて下さい。 ・本を見ないで下さい。 	<ul style="list-style-type: none"> 指 示 禁 止 		

		•お願います。	依頼、指示	6にあった「Introductory Lesson」はなくなっている。
32 (6)	●			
33	●			
34	●			
35	●			別枠で設けてはいないが、6課は「InYor Classroom / Classroom Expressions」。
36	●	•どうぞ、お入り下さい。 •ちょっと待って下さい。	勧め・促し 依 頼	
37 (4)	●			
38	●			ただし教師用指導書には「～てください」を中心に教室用語があげられている。*2
39	●			ただし、1～4課が「Useful Greetings」の章となっている。
40 (10)	●	•始めましょう。 •もう一度。	指示・促し 指 示	
41	●			ただし、1課は「あいさつ」となっている。
42 (3)	●			
43	●			
44	●			
45	●	•始めよう。 •見て (下さい)。	指示・促し 指 示	
46	●	•見て (下さい)。	指 示	
47	●			1課の一部であいさつことばをまとめて取り上げている。
48	●			ただし、1課があいさつことばの導入課となっている。
49	●			ただし、1課があいさつことばの導入課となっている。
50	●	•聞いて下さい。	指 示	
51	●	•もう一度言って下さい。 •～さん、どうぞ。 •授業を始めましょう。	指 示 促し・指示 指示・促し	
52	●			
53	●			
54	●			
55 (9)	●			ただし、1～4課が「Useful Greetings」の章となっている。
56 (2)	●	•ちょっと待って下さい。 •もう一度お願いします。	依 頼 依 頼	
57	●			
58 (5)	●	•では、始めましょう。 •聞いて下さい。 •質問はありませんか。 •では、終わります。	指示・促し 指 示 質問促し・質問 交付意志表示 終了明示	
59 (4)	●			

注・各教科書の働きかけ表現の内、同じ形で表され同じ表現意図を持つものが複数あった場合は、原則として、一例だけ提示した。

・表中、二重線は年代の区切りを示す。

・*1 No. 12 の学生用文法解説書にある働きかけ表現は次の通り。「(日本語で、もう一度、みんなで、後について) 言って下さい」(指示)・「答えて・聞いて・読んで・本を開けて・閉じて・書いて・覚えて下さい」(指示)、「わかりますか」(理解確認)、「よくできました」(評価示し)、「違います」(誤り指摘)。

・*2 No. 38 の教師用指導書にある働きかけ表現は次の通り。「今日は……の勉強をしましょう」(指示)、「聞いて下さい」(指示)、「英語を使わないで下さい」(禁止)、「それは今日の授業はここまでです」(終了明示)。

「ここまでです」各1, であった。「Vて下さい」はさまざまな形を持ち, 「(もう1度・大きい声で・もっとゆっくり・日本語で・みんなで) 言って下さい」「本を閉じて下さい」「見て下さい」「～さんに聞いて下さい」「繰り返して下さい」「読んで下さい」「ちょっと待って下さい」など, 教室内を中心に頻繁に用いられるであろう表現として提出されている。「Vましょう」は, 1例を除いてすべて「始めましょう」であった。「Vないで下さい」は「本を見ないでください」2, 「英語は(を)使わないで下さい」2であった。

また, その表現意図は, 指示23 (52.3%), 次いで依頼8 (18.2%), 禁止4 (9.1%), (授業終了の) 明示3 (6.8%), 促し・勧め各2 (4.5%), その他2であるが, 依頼の内の「もう1度お願いします」の2例及び促しの「～さん, どうぞ」の2例は状況設定がなく表現意図の明確な決定が困難で, 状況によっては指示ととれる場合がある。そうすると, 採取した働きかけ表現44例の内, 34例, 77.3%が教室内で指示を与える機能を持った表現といえることができる。

さらに, それらの指示表現は当然のことながら教師側の発話であるが, 教室用語で学習者側の発話あるいは学習者も頻繁に用いるであろうと思われる発話には, 「お願いします」「質問があります」「ちょっと待って下さい」があった。特に「質問があります」は, その機能が注目喚起と考えられる点が特異であった。

4. ま と め

以上の結果をまとめると, 日本語学習が始まって1週間たったころ, 教科書の約1割ぐらゐを消化したところで, デパート・商店・レストランにおいて, 「Vて下さい」「どうぞ」「Nを(数)下さい」などの表現を使って物品を購入したり注文したりする際に必要な諸機能を持った発話がなされる, という働きかけ表現初出の典型が浮かび上がる。しかしながら, 今日の学習者・その学習目的・学習形態などの多様化の中にあってはそれはあくまでも一典型に過ぎず, 出版点数が急増する'90年以降, 場面・状況, 表現形はそれぞれほぼ20種, 表現意図は約10種を数えるに至っている。それは, 「初級の文型が現実の生活の中で, どのように使われるかを, 一つ一つ見直」(No. 28『文化初級日本語I』「この本の使用に当たって」pp. 1) そうという, 教育現場の機能重視の姿勢の表れであると考えられるが, さらにより子細にみると, こうし

た姿勢の具体化は、従来からあるものの解釈を変える（従来からあるものにある解釈を付与する）形と、従来はこの段階では扱うことのなかったものを導入する形によってなされている。

表現形を例に取るならば、前者の例として、事物の一致を表す「NはNです」・事物の存在を示す「Nがあります」がそうした抽象概念を離れ、前者は物品の手渡しにおける物品受け取り促し、後者は物品の提示要求などと、具体的な場面・状況の中で明確な機能を持たされているケースがある。短期学習者用教材 No. 39 及びその改訂版の No. 55 の第1課における「どうぞ」と「どうも」に多種多様な機能を持たせて提出しているケースは、その最たる例といえよう。一方、後者の例としては、従来はもっと後で提出されていた表現「Vて下さい」が、「見せる・見る・待つ」などさまざまな動詞とともに用いられ、依頼・要求などの意図を持って働きかけ表現の初出となっているケースがある。中には、「お待ち下さい」などという従来のこのレベルでは到底扱われていなかったであろう形で提出されているものもある。けれども、全体としては後者の傾向がより顕著で、現実のある状況における意志疎通形式をそのままの形で導入し、その談話の中で当該指導項目に実際的なある機能属性を持たせようというのが今日の流れである。

しかし、それとはまったく違った形で機能を重視しようという姿勢も見受けられる。すなわち、初級段階の教科書というと従来は構造シラバスのみの構築しか見られなかったものが、それと並行する形で機能シラバスをもその中に構築しようという姿勢である。たとえば、No. 44 及びその改訂版 No. 59 では、各課、文法解説の他に「Conversation Notes」というコーナーを設け、当該課関連の留意事項ならびにコミュニケーション・ストラテジーを取り上げている。No. 59 の第1課では、自己紹介における相手の呼び方・あいづち、会話の切り出し方・自己紹介において触れるべき事柄・身分差のあるときの紹介の順序・会話の切り上げ方などに関する情報が提供されている。同様な試みは、No. 57 にも見られる。以前にもこうした情報が扱われることはあったが、それは、補足情報としてしかも必要に応じて言及されるのがもっぱらであった。それが、各課明確な形を持ち、しかも十二分な量を持って取り上げられている。明らかに、文法情報の構築のみならず、場に立脚した意志疎通能力の育成を意識していると思われる。ちなみに、No. 59 における働きかけ初出は、第1課の、自己

紹介の場面における「ちょっと」という注目喚起及び「～と呼んで下さい。」という自己の呼称依頼である。今回の調査で自己紹介という場面において働きかけ表現初出となったのは No. 19, No. 22, No. 22 の改訂版 No. 56 の 3 教科書 4 例 (No. 19 は 2 例) であるが、いずれも、「(～は), ～です。どうぞ。」の形で名刺の受け取りを促すものであり、No. 59 がそれらとは明らかに異なる性格を持っていることがわかる。

今回の調査・分析は働きかけ表現の初出を対象を絞ったが、2 回目以降の働きかけ表現提出においては、以上のような場面・状況、表現形、表現意図の多様化、機能の別枠取り上げにおける情報の量と質の拡大、その他現実の意志疎通を可能にする能力の育成を図る諸方策が複合的に起こっていることが想像される。ことに'90年以降に出版された教科書は各々の対象学習者の学習目標に沿うべく独自の特性を備えており、そうした傾向がより著しいものと思われる。しかも、その教科書に盛られている情報の与え手である教師の指導技術・能力もより高度化している。それらが総合された指導の場・学習の場で今日起こっているもの、それは単に用が足りるという日常的な意味のコミュニケーション能力の育成・習熟ではなく、もう一段上の、個別的・臨時的場における意志疎通のあり方の実現方策の提供・獲得であると考えられる。

注

- 1) 「叙述型」・「非叙述型」教科書本文の考察については、日本語教育学会 (1988) pp. 117~179, および同 (1991) pp. 162~167 参照。
- 2) ちなみに、今回の調査で初出表現形として最も多かったのは動詞系で約 7 割を占めるが、それを考慮すると、初級教科書の 10% 前後の位置で動詞の何らかの形が初出となっているかと考えられる。

参考文献

- 文化庁文化教育部国語課 1988『中国帰国者用日本語教育指導の手引』
言語文化研究所附属東京日本語学校 1989『開校40周年記念 東京日本語学校の歩み』
河原崎幹夫, 吉川武時, 吉岡英幸 1992『日本語教材概説』(北星堂)
国際交流基金 1989『日本語教科書ガイド』(北星堂)
日本語教育学会 1988「昭和62年度文化庁日本語教育研究委嘱 日本語教育機関におけるコース・デザインの方法とコース運営上の教師集団の役割

の分担に関する調査研究 —— 報告書 ——」

1991『日本語教育機関におけるコース・デザイン』

1992『日本語教材データファイル 日本語教科書』

阪田雪子 1989「学友会の教科書ができるまで」『学会ニュース 46号』日本語教育学会編 (1989)

関 正昭 1990『日本語教育史』愛知教育大学 日本語教育コース 平成元年度文部省大学教育方法等改善経費による試行テキスト

なお、本論は、同志社女子大学総合文化研究所研究プロジェクト「教科書・教材から見た、戦後50年における日本語教育の変遷」の一環として行った。

採取初出働きかけ表現

No.	上：働きかけ表現形	表現意図	対人関係	状況
	下：その受け表現			
1	• お立ちなさい。	指示・命令	(教師 学習者)	学習者に教室の出入りをさせそれを叙述する，という本文
	→受け表現なし			
2	• どうぞ。	勤め・依頼	状況設定なし	状況設定なし。Useful Expressions 的導入。
	→受け表現なし			
	• どうぞもう一度。	勤め・依頼	状況設定なし	状況設定なし。Useful Expressions 的導入。
	→受け表現なし			
3	• 黒いシャツもありますか。	物品提示要求	客 店員	購入予定のシャツがあれば見せてくれるよう，頼む。
	→黒いシャツはありません。	物品提示不可示し		
	• あの絹のをください。	購入希望物明示及び購入意図表示	客 店員	吟味していた靴下を購入する旨，店員に伝える。
	→ありがとうございます。	業務上謝辞		
	• ちょっとお待ち下さい。	業務上待ち依頼	店員 客	包装等，購入手続きで客を待たせる。
→受け表現なし				
4	• さあ，始めましょう。	指示	(教師 学習者)	教室用語の導入。朝のあいさつをして，本文に入るという設定の中での提出。
	→受け表現なし			
5	• 何をしましょうか。	意向伺い	特定できず	休日の過ごし方について話す。
	→今，紅葉がきれいでしょう。ハイキングに行きましょう。	提案・誘い		
6	• ちょっと待って下さい。	依頼	特定できず	本来動詞の時制などの導入課であるが，教室用語的に導入されている。
	→わかりませんか。	先方の理解状況確認		
7 (1)	• お立ちなさい。	指示・命令	(教師 学習者)	学習者に教室の出入りをさせそれを叙述する，という本文
	→受け表現なし			
8	• もう一度言って下さい	指示	特定できず	1・2課を「Useful Expressions」として，事実上，教室用語の導入課としている。
	→受け表現なし			
9	• ちょっと待って下さい。	業務上待ち依頼	学校職員 留学生	留学生に渡す奨学金を手に取る。
	→受け表現なし			
	• どうぞ	業務上物品提示・受け取り促し	学校職員 留学生	留学生に奨学金を渡す。
→どうもありがとう	謝辞			
10	• 私の鍵を下さい。	物品渡し依頼	宿泊客 従業員	ホテルのフロントで鍵をくれるよう頼む。
	→何番ですか。	対象物特定依頼		
	• ちょっと待って下さい。	業務上待ち依頼	従業員 宿泊客	宿泊客の鍵を探す。
	→受け表現なし			

No.	上：働きかけ表現形	表現意図	対人関係	状 況
	下：その受け表現			
	・はい、どうぞ →受け表現なし	業務上物品提示 ・受け取り促し	従業員 宿泊客	宿泊客に鍵を渡す。
11	・フィルムはありますか。 →はい、ございます。	物品提示要求 提示要求受け	客 店員	フィルム購入予定で、その所在を確かめる。
	・ちょっとお待ち下さい。 →受け表現なし	業務上待ち依頼	店員 客	客にいわれて、商品を取りに行く。
	・じゃ、それを下さい。 →ありがとうございます。	購入希望物明示 及び購入意図表示 業務上謝辞	客 店員	示されたレンズを購入する旨、店員に伝える。
	・お茶をどうぞ。 →はい、いただきます。	飲食勧め 飲食勧め受け	友人の母 訪問者	お茶を勧める。
13	・これを下さい。 →はい、ありがとうございます。	購入希望物明示 及び購入意図表示 業務上謝辞	客 店員	吟味していた靴下を購入する旨、店員に伝える。
	14	・それでは、30円のを五つ下さい。 →はい、ありがとうございます。	購入希望物明示 及び購入意図表示 業務上謝辞	客 店員
・もっとやすいのがありますか。 →はい、あります。		物品提示要求 提示要求受け	客 店員	購入予定の値段の鉛筆の所在を確認する。
・ちょっと見せて下さい。 →どうぞ。		物品提示要求 物品提示要求 応諾・提示	客 店員	購入予定の鉛筆を吟味させてくれるよう頼む。
15		・それでは、あれを見せて下さい。 →はい、今持ってきますから、ちょっと待って下さい。	物品提示要求 物品提示要求 応諾、 業務上待ち依頼	客 店員
	・では、これを下さい。 (98,000円ですね) →(はい、そうです)	購入希望物明示 及び購入意図表示 (値段確認)	客 店員	吟味していたコートを購入する旨、店員に伝える
	16	・それでは、大きいのを3本下さい。 →はい、ありがとうございます。	購入希望物明示 及び購入意図表示 業務上謝辞	客 店員
17		・魚フライ定食をお願いします。 →350円いただきます。	購入希望物明示 及び購入意図表示 販売応諾・ 物品値段提示	客 店員
	18	・ご飯ですよ。 →はい、すぐ行きます。	着席要求 着席要求 応諾	母 子
・お砂糖は。 →はい、お願いします。		嗜好品添加申し出 嗜好品添加依頼	義姉 弟	コーヒーに砂糖を入れる。

	・タバコ、吸いますか。 →いいえ、タバコは吸いません。	喫煙勧め 喫煙断り	兄 弟	弟にタバコを勧める。
19	・これは私の名前です。 どうぞよろしく。 →ありがとうございます。	物品提示・ 受け取り促し 受け取り表示, 謝辞	外国人ビジネスマン 日本人ビジネスマン	ビジネスマン同士が名刺交換を して初対面のあいさつを交わす。
	・私の名刺です。どうぞ。 →ああ、山本さん。	物品提示・ 受け取り促し 受け取り応諾, 謝辞	日本人ビジネスマン 外国人ビジネスマン	同 上
20	・お願いします。これはいくらですか。 →はい、…gグラムですね。 170円です。	注目喚起及び 値段表示要求 注目表示及 び値段表示	客 郵便局員	郵便物の値段を聞く。
	・90円の切手を下さい。 →何枚ですか。	購入希望物明示 及び購入意図表示 対象量確認	客 郵便局員	切手を購入する。
21	・スミスさん、今晚、六本木へ行きま せんか。 →六本木ですか。 それより新宿へ行きませんか。	遊興誘い 不同意表明, 代案提示	(日本人学生 留学生)	夜の外出に友人を誘う。
	・新宿で映画を見ましょうよ。 →それもいいですね。	遊興誘い 同意表明	(留学生 日本人学生)	友人を映画鑑賞に誘う。
22	・私の名刺です。どうぞ。 →どうもありがとうございます。	物品提示・ 受け取り促し 受け取り応諾, 謝辞	日本人ビジネスマン 外国人ビジネスマン	ビジネスマン同士が名刺交換を して初対面のあいさつを交わす。
23(8)	・もう一度言って下さい。 →受け表現なし	指 示	特定できず	1, 2 課を発音とかなの導入課 としており、実質は3 課から始 まる。
24	・いっしょに行きませんか。 →お願いします。	行案誘い 行案誘い応諾	特定できず	週末の過ごし方を尋ねられてい たが、来週末の行案に聞き手を 誘う。
	・(お願いします) →では、いっしょに行きましょう。 (受け表現なし)	行案誘い応諾 行案予定確認	特定できず	
25	・起立, 礼, 着席 →受け表現なし	授業開始等指示	(教師)	1 課を教室用語・日常表現の導 入課としている。
26	・では、ホテルへ案内します。 →ありがとうございます。	旅程案内申し出, 出発促し 謝 辞	日本人社員 外国人社員	空港で外国人社員を迎え、宿泊 先へ案内する。
	・東京ホテル、お願いします。 →銀座ですね。	行き先指示 行き先確認	客 運転手	タクシーに乗り、行き先を告げ る。
27	・それじゃ、はい。 →ありがとうございました。	購入意図表示・ 代金渡し 業務上謝辞	客 店員	駅のホームで新聞を購入する。
28	・この大きい猫は誰のですか。 →あ、それは私のです。	対象物受け取り要求 対象物受け取 り要求応諾	獣医 飼い主	猫が勝手に診察室に入って来、 邪魔なので飼い主に引き取らせ る。

No.	上：働きかけ表現形 下：その受け表現	表現意図	対人関係	状 況
	・その小さい猫は誰のですか。 →受け表現なし	対象物持ち出し禁止表示	飼い主 子供	子どもが自分の飼っている猫を連れて行こうとしたので、注意する。
29	・すみません、ちょっと貸して下さい。 →はい、どうぞ。	物品借用依頼 物品借用依頼応諾	(留学生 留学生)	友人にボールペンを借りる。
30	・フィルムを一つ下さい。 →フジですか、コダックですか。	購入希望物明示及び購入意図表示 対象物確認	客 店員	フィルムを購入する。
31(6)	・しませんか。 →ちょっと…。 ・飲みませんか。 →ありがとうございます。 いただきます。	誘 い 断 り 飲食勧め 飲食勧め謝辞	日本人 外国人 (それ以上特定できず) 日本人 外国人 (それ以上特定できず)	動詞の活用形の一つとして否定形を出しているがその最も身近な使用例として、誘いの形が教室用語的に提出されている。
32(6)	・それでは、大きいのを3本下さい。 →はい、ありがとうございます。	購入希望物明示及び購入意図表示 業務上謝辞	客 店員	吟味していた花を購入する旨、店員に伝える。
33	・はい、お茶。 →いただきます。	飲食勧め 飲食勧め受け	ホームステイ先の母 外国人	下校後、日本語のクラスについて尋ね、お茶を勧める。
34	・これはプレゼントです。どうぞ。 →ありがとうございます。	物品提示・受け取り促し 物品受け取り・謝辞	(日本人 外国人)	贈り物を贈る。
35	・始めましょう。 →受け表現なし ・見て下さい。 →受け表現なし	指 示	(教師) (教師)	教室用語の導入課。
36	・いらしゃいませ。どうぞ。 →失礼します。 ・これはおみやげです。 ワインとチーズです。 →ありがとうございます。 ・飲み物をどうぞ。 →これはなんですか。 ・もういっぱいいかがですか。 →いいえ、もう結構です。	入室促し 入室促し受け・謝辞 物品提示・受け取り促し 物品受け取り・謝辞 飲食勧め 飲食勧め受け・対象物確認 飲食勧め 飲食辞退	家人 友人 友人 家人 家人 友人 家人 友人	玄関で、訪問客を迎え入れる。 招いてくれたお礼にプレゼントを渡す。 客に飲み物を勧める。 さらに客に飲み物を勧める。
37(4)	・これはあなたの部屋の鍵です。 どうぞ。 →どうもありがとうございます。	物品提示・受け取り促し 物品受け取り・謝辞	教師 学生	学生に部屋の鍵を渡す。

38	・パスポートを見せて下さい。	物品提示要求	税関係官 渡航者		税関係官が渡航者にパスポートを見せるよう、求める。
	→はい。	物品提示要求応諾			
39	・どうぞ。	入室促し	家人	訪問者	「どうぞ」と「どうぞ」で、入室や着席を促したり飲食を勧めたり辞退したり、サバイバル的に行動することを指導するための単元。
	→どうも。	入室促し受け・謝辞			
	・発話なし →寿司はどうも。	飲食辞退	特定できず		
40(10)	・308 お願いします。	物品渡し依頼	宿泊客	受け付け	宿泊先のフロントで部屋の鍵をくれるよう頼む。
	→はい、どうぞ。	物品提示・受け取り促し			
	・あつ、ちょっと待って下さい。 →受け表現なし	注目喚起	受け付け		
41	・どうぞ。	物品提示・受け取り促し	日本人	外国人	友人にプレゼントを贈る。
	→どうもありがとう。	物品受け取り・謝辞			
42(3)	・はい、お茶。	飲食勧め	ホームステイ先の母	外国人	下校後、日本語のクラスについて尋ね、お茶を勧める。
	→いただきます。	飲食勧め受け			
43	・忘れ物ですよ。	注目喚起	(教師)	(学生)	教師が教室内の忘れ物に気付く。
	→受け表現なし				
	・ああ、リーさんのですか。 はい、どうぞ。 →どうもありがとうございます。	物品提示・受け取り促し 物品受け取り・謝辞	(教師)	(学生)	
44	・ああ、山下君。ちょっと。	注目喚起	教師	学生	パーティで学生を呼び止める。
	→はい。	注目表示			
	・シャルマと呼んで下さい。 →ああ、じゃ、シャルマさん。	呼称依頼 呼称確認	留学生	学生	
45	・シャンプーを下さい。	購入希望物明示及び購入意図表示	客	店員	シャンプーを購入する。
	→はい、どうぞ。	業務上物品提示受け取り促し			
46	・すみませんが、その手袋、取って下さい。	物品手渡し依頼	研修生	従業員	作業用の手袋を取ってもらう。
	→はいよ。	物品手渡し			
47	・それからケーキをお願いします。	飲食物注文	客	ウェイター	喫茶店でケーキを注文する。
	→はい。	注文受け			
48	・立ちましょう。	指 示	(教師)	(児童)	あいさつ、教室用語の導入課。ただし、「Vましょう」表現は31課に別途設けてある。
	→受け表現なし				
49	・起立、礼、着席	授業開始等指示	(教師)	()	1課を教室用語・日常表現の導入課としている。
	→受け表現なし				

No.	上：働きかけ表現形 下：その受け表現	表現意図	対人関係	状 況	
50	• それからエアログラムも下さい。 →何枚ですか	購入希望物明示 及び購入意図表示 対象量確認	客 郵便局員	郵便局で、エアログラムを購入する。	
	• 少々お待ち下さい。 →受け表現なし	業務上待ち依頼	郵便局員	代金を受け取り、釣り銭を用意する。	
	• あの靴を見せて下さい。あの靴は革ですか、ビニールですか。 →どの靴ですか。	物品提示要求 対象物確認	客 店員	デパートで、靴を吟味する。	
	• じゃ、始めましょうか。 →はい。	授業開始指示 授業開始同意	(教師 学生)	軽いあいさつをして、その日の授業を始める。	
51	• すみませんが、この字を見て下さい。この字は正しいですか。 →ちょっと見せて下さい。	対象物点検依頼 対象物点検依頼受け	特定できず	書き方の不確かな字をチェックしてもらう。	
	52	• 見て下さい。 →受け表現なし	指 示 (教師)	1～6課をあいさつ・日常語などの導入課としている。	
53	• 水を一杯下さい。 →受け表現なし	依 頼	状況設定なし	その課の学習項目を、単元冒頭に列挙する形で提示。	
	• ライターを貸して下さい。 →受け表現なし	依 頼	状況設定なし		
	• 教室の中でタバコを吸わないで下さい。 →受け表現なし	禁 止	状況設定なし		
	• 立ちなさい。 →受け表現なし	指示・命令	教師 学生	学生を立たせ黒板の方に来させさらに名前を書かせ、それを叙述するという、本文。	
54	• ちょっと待って下さい。 →受け表現なし	待ち依頼	外国人 日本人	チョークの数を尋ねられて、数える間待ってもらう。	
	55 (9)	• どうぞ。 →どうも。 • 発語なし →寿司はどうも。	入室促し 入室促し 受け・謝辞 飲食辞退	家人 訪問者 特定できず	「どうぞ」と「どうぞ」で、入室や着席を促したり飲食を勧めたり辞退したり、サブイパル的に行動することを指導するための単元。
56 (2)		• 私の名刺です。どうぞ。 →どうもありがとうございます。	物品提示・ 受け取り促し 受け取り 応諾・謝辞	日本人ビジネスマン 外国人ビジネスマン	ビジネスマン同士が名刺交換をして初対面のあいさつを交わす。
		57	• ジムさん、ご飯ですよ。 →はい。	着席要求 着席依頼応諾	ホームステイ先の母 外国人

	• さあ、どうぞ。 →はい。	飲食開始勧め 飲食開始勧め受け	ホームステイ先の母 外国人	食事を始めるよう、促す。
	• 食べてみますか。 →いえ…、あのう…、結構です。	飲食勧め 飲食辞退	ホームステイ先の母 外国人	下宿している外国人に、たこの料理を勧める。
58 (15)	• あのテーブルがいいですね。 →どうぞ。	席提案 着席勧め	留学生 店員	同伴者によさそうな席を提案する。
	• ハンバーグと海老フライと、 コーヒートを二つ下さい。	購入希望物明示 及び購入意図表示	留学生 店員	レストランで飲食物を注文する。
59 (44)	• ああ、山下君。ちょっと。 →はい。	注目喚起 注目表示	教師 学生	パーティで学生を呼び止める。
	• シャルマと呼んで下さい。 →ああ、じゃ、シャルマさん。	呼称依頼 呼称確認	留学生 学生	初対面の人に自己紹介をする。

注・「対人関係」は、各欄左側が話し手、右側が聞き手を表す。() で示されたものは、教科書本文中に明確に特定される材料はないが、そうであろうと推察されるものを示す。

- 各教科書の働きかけ表現の内、同じ形で表され同じ表現意図を持つものが複数あった場合は、原則として、一例だけ提示した。
- 表中、二重線は年代の区切りを示す。